

開聞岳（922m）へ

岩井 淑

11月22日（水）曇り、小雨

20才の時だった。20才を記念して2週間の九州ワイド周遊券をポケットに入れ、宿泊先も決めずに旅に出たのだった。しかも、下駄ばきでぶらっという旅だった。年末始の九州地方は寒かった。雪と霧氷に包まれた雲仙岳の寒暖計は零下13度を指し示し、阿蘇山でも雪の中だった。そして、南下し別名を『薩摩富士』と呼ばれている開聞岳に出会った。海から直接立ち上がっているスッパリした山容と出会った時、登りたいと思った。それから20年。今、その山に登ろうとしている。実に20年ぶりの会合である。

枕崎線は国鉄からJRへの移行に伴い廃止され、バス路線へと変更されてしまい、20年前に降り立った開聞駅は今はない。

JR山川駅。有人駅としては本土最南端の駅となり、湾を挟んで港と向かい合っており、ハイビスカスの花々が咲き乱れ、ツマベニチョウの舞う姿が見受けられる南国の駅である。そこで下車しJRバスに乗り換える。

JRバスの開聞登山口で下車し、一直線に開聞岳へ向かう。開聞中学校脇に登山口の指標が立てられており、4700mほど登ると標高922、2mの山頂へと到着することになるわけだ。

指標から300mも歩いた左側に朱塗りの鳥居とともに「天の岩戸」なるものが登場する。開聞町教育委員会が立てた説明板2枚と10基ほどの五輪塔や祭壇が置かれ、お酒や花が添えられ、辺りは奇麗に掃き清められている。そこから100mほど先にある無料休憩所に寄った際にも感じたことなのだが、やはり塵ひとつ落ちておらず、こちらも清掃が行き届いていた。また、バスを降りてから中学校までの300mほどの間に4人の子供に出会ったが、4人が4人ともに帽子を脱いで「おはようございます」と挨拶してくれたではないか。都会ではまず体験出来ないことだ。ザックを背負い、道を歩いていると一目でよそ者と分かるはずだが、大人にもよく挨拶される。「天を敬め、人を愛す」という西郷隆盛の言葉を鹿児島県人は環境として持っているのだろうか、と考えてしまった。そして同時に挨拶の基底になっている心の問題、人間性の発露ということにも考えが及んでしまう。そして、挨拶され「アレッ？ ドキッ！」とする心に知らず知らずの内に「都会人」に染まってしまっている自分自身を情けなく思わずにはいられない。

1合目ぐらいに無料休憩所と公衆便所が設置され、脇に歌碑が建っている。斉藤茂吉が昭和14年10月に開聞岳と長崎鼻に遊んだときに詠んだ歌の中の一首が選ばれているという。この位置から仰ぎ見る開聞岳はトロイデ・コニーデ型火山であることが実によく分かる。すなわち、8合目辺りから新しく噴火して出来た火山が積み重なっている典型的な二重式火山が見られるのだ。

登山道は2合目からは赤松の茂る林の中へと入っていくが、道幅は1m～1.5m程で歩き易い。3合目からは大小の岩がゴロゴロ転がる道へと変化するが、アカガシをはじめとする常緑広葉樹林の中の登山道であり、おまけに今にも泣きだしそうな空模様のため、

足元が非常に暗いので必要以上に神経を使う。

開間岳の登山道は約4700mの距離を10で割った距離を1合にとってあるわけだが、1合回り12、3分のペースで登り、5合目を過ぎたところで長崎鼻が眼下に眺められたのだが、海は空の色を反射し暗い灰青色である。

ピーヨ、ピーヨというヒヨドリの警戒を発する鳴き声の実にやかましいが、彼らにとっては自分達のテリトリーに変な者が入ってきたので仲間に注意の合図を送っているわけだ。岩場の到るところにイヌツゲの黒い実を含んだフンが見られる。そういえば、薩南地方の土産の1つにツゲ製品が挙げられるが、これだけ多くのイヌツゲを見ているとそれほどうなずいてしまう。

7合目を過ぎると登りははいよいよ本格的になり、同時に周りに生えている樹木は背の高いものはなくなり、みな2~3mのものとなってくる。

9合目を過ぎる頃、心配していた空模様が泣きだしポツポツしだした。岩が濡れているため滑り易いので十分に注意しなければならない。登山道は山頂に向かって丁度、でんでん虫の殻のように右回りに渦巻き状に登って行くので、先ほどとは逆側の池田湖が眼下に眺められるようになった。もう僅かで山頂だ。

登り着いた山頂には、イヌツゲの樹木のなかに薩摩一の宮と呼ばれている枚開（ひらきき）神社の奥社としての御岳神社が建ち、高さ2mほどの鳥居と50cmほどのほこらが祭られ、さらには大岩に注連縄がかけられている。

山頂大岩の東側には御影石の展望案内図が2枚設置されているのだが、生憎の空模様であり、昨日見えていた竹島・硫黄島・黒島・種子島・屋久島などの島々や桜島や佐田岬は勿論の事、一昨日縦走をした霧島連山も360度の大パノラマによって眺められることが出来るはずだったのだ。とつても残念だが天候ばかりはいかんともしがたい。山頂は火口に沿って遊歩道が作られているが、展望が望めないで火口廻りは中止する。

朝の天気予報によると「薩南・大隅地方の降水確率は10%で、お昼ごろから雨になるでしょう」とのことだったので、山頂では雨は降っていないとはいえ、9合目回りではポツポツ来ていたので、降られない内に下山しなければならない。

標高922、2mの開間岳は現在では休火山であり、別名『薩摩富士』『筑紫富士』の名前が示すように、裾野の3方を海に没した秀麗な山容といい、山頂での360度の文字通りの大パノラマといい、それにもまして誰でもが約2時間で登頂できる手軽さがこの山が身近な山と感ぜられる由縁であろう。

年末の大晦日にはヘッドランプの明りを頼りに御来光を拝むために次々と登山者の列が続くという。そして、今年の元旦のTV中継では父親とともに登った3才の女の子の姿が放映されたという。また、登山口脇にある中学校では2年生になると全員が山頂までの登山をすることを学校行事に取り入れているというし、登山道の要所要所に少年消防班の「山火事を起こさないように」という呼び掛けが見受けられた。この開間岳という山は、地域の人達に愛されている山だという感じを強く受ける山であった。